

勅令が伝えてくれた神の救い**ルカ2:1～14 / 李正雨師**

今日の福音書の構造は本当に面白いです。1節～7節、8節～14節の物語が互いに対立しています。そしてローマ皇帝の勅令が出ていますが、この話を通して神様の摂理が現れています。今日の福音書の始まりは、皇帝の命令から始まります。今日の福音書に登場している皇帝アウグストゥスは、ローマ全体を統一したローマ帝国の初代皇帝でした。その前には、3人の執政官と元老院がローマを導いていました。アウグストゥスもこの3人の執政官の一人でしたが、政治と戦争を通してこの執政官体制を崩します。そしてこの勢いを駆けて、元老院の承認を受け、自分が統一ローマ帝国の初代皇帝になります。だからアウグストゥスは、どれほど大きな力を持っていたのでしょうか。さらに、アウグストゥスはローマを統一し、皇帝になった自分を神の子と称することを命令しました。自分の祖父であったユリウス・カエサルが神になったからだと主張しました。このような大きな力を持っていたアウグストゥスの命令が、今日の福音書1節に書かれています。「**そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。**」

皇帝が住民登録を命じたのには、様々な理由があると思いますが、確かなことは、お金と関連していたということです。当時のローマは、帝国だったので、管理のためには大きなお金が必要でした。それでアウグストゥスは、多くの地域に官庁を立てて税金を納めさせ、住民登録によって住民税が漏れることがないようにしたのです。力を維持するためのお金を集めるために、住民登録という勅令を下したというのです。そして今日の福音書2節には、「**これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。**」と書かれています。シリアはユダヤ人の地域ではありませんでした。私の後ろにある地図を見ればお分かりになると思いますが、シリアは、ガリラヤの北にある異邦の国でした。マルコによる福音書7章には、シリア・フェニキアの女性の話が書かれています。福音書の著者は、この女性を紹介するときにギリシア人だと言います。ところが、今日の福音書では、ユダヤとは関係のないシリアの総督の名前が書かれています。なぜでしょうか。それは、ユダヤ人の領主がいなかったため、シリアの総督がユダヤをシリアと一緒に管理していたという意味です。つまり、ユダヤがローマの直轄体制の中に入っていたというのです。そして、まだピラトがユダヤの総督になる前の話だという意味にもなります。

このすべての状況をまとめてみましょう。最も力のある統一ローマの初代皇帝であったアウグストゥスが勅令を下します。そして彼は、自分を神の子だと称しなさいと命じた皇帝です。この勅令は、住民登録のための命令として、裏にはお金を集めるための手段であり、そのお金は、アウグストゥスの力を維持するためのものでした。さらに、当時のユダヤには領主がいなくて、シリアの総督がユダヤも管理していました。ユダヤがローマの直轄体制の中に入っていたということです。このような状況の中で下された勅令によって、ユダヤ人たちは住民登録をするために、おのこの自分の町へ旅立ちました。この中に、ヨセフという人がいました。彼はいいなずけを連れて、住民登録をするために、自分の町であるベツレヘムに帰りました。この時、マリアは身ごもっていました。そしてベツレヘムのある家の馬小屋で、御子を産みます。今日の福音書6-7節の言葉です。「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼

い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」

ここまでの今日の福音書の前半の御言葉です。すべてがローマ皇帝の中心の歴史のように見えます。しかし、今日の福音書の後半は、この前半の言葉と対立します。そして、前半に書かれているすべての話をひっくり返します。前半の始まりには、皇帝が登場している一方、後半の始まりには、羊飼いが登場しています。この二人は、まったく違う状況の人々です。最も高く崇められている皇帝と、属国のイスラエルの中でも、最も低く扱われている羊飼いです。当時の羊飼いは、仕事がつらくて危険ただけでなく、安息日を守ることが大変な仕事だったので、皆が避けていた職業でした。それで、主に貧困な人々と低層の人々がしていた仕事でした。しかし、神さまの選択は羊飼いでした。神さまは羊飼いたちに天使をお遣わしになりました。そして、羊飼いたちに福音を聞かせてくださいます。10節と11節の言葉です。「天使は言った。『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。』」

神さまは、ご自分のメッセージを当時の最も小さな者たちに伝えられました。自分自身を神の子だと主張した皇帝には、何のメッセージも与えられませんでした。そしてそのメッセージの内容は、衝撃的なことでした。本当の神の子、救い主がお生まれになったということでした。旧約聖書のミカ書5章1節には、ベツレヘムでイスラエルを治める者が出るという預言が書かれています。預言者ミカの預言が成し遂げられたのです。天使はミカの預言を裏付けるように、「今日ダビデの町で…救い主がお生まれになった」と言います。メシアがダビデの子孫であるという言葉は、当時のユダヤ人であれば、みんなが知っていたことでした。メシア、神さまの救いがこの世に臨まれたのです。

今日の福音書は、ローマ帝国の皇帝とイエスさまを、同時に私たちに見せてくれます。そしてこの二人を対立させ、後半の言葉を通してすべての状況をひっくり返します。力ある皇帝、ローマを統一した偉大な皇帝ですが、彼は、神の子ではありませんでした。彼は自分のために勅令を下しましたが、この勅令がもたらしたことは、預言の成就、すなわち神の子の誕生でした。自分の勅令が、自分が神の子ではないことを証明するために使われたということです。一般に、人々は、この世を導いていくのは、偉大な人とその人が持っている力だと思っています。どうしたことか訳が分かりませんが、これらの考え方は、時間が経つにつれてますます深まっていくみたいです。しかし聖書は、それは真実ではないと語っています。すべてが力ある人を中心に流れているように見えますが、それさえ神さまの許しがなければ、できないものだと語っています。

クリスマス、イエスさまのご誕生は、新しい時代が始まったということの意味しているものです。力がこの世の中心となったようですが、神さまはイエスさまを通してこの世に新しい時代を開かれました。この新しい時代は、力が中心となったこの世と対立し、この世に愛、謙遜、尊重などを教えてくれるのです。そして神さまは、これをイエスさまに従っている私たちと教会を通して成し遂げられるのです。今日の福音書14節には、こう書かれています。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」神様は天の栄光をここにもあるようにしてくださいました。その栄光の中で、私たちは真の平和を受けることができます。この平和が皆様と共にありますように。生活が貧しくてつらい、無視されているこの世のすべての羊飼いたちと共にありますように、主の御名によって祈ります。アーメン